

個社会-2

東京都渋谷区 塚崎 義人

「かたよらないところ、こだわらないところ、とらわれないところ、

ひろく、ひろく、もっとひろく～～～」

薬師寺元管長・故高田好胤師

領域	構成	<般若心経>		
眼	(色)	[縁]	[無 明]	[因]
		↑↓	
意	(受)	[四 諦]	[照 見]	[般 若]
		↑↓	
識	表 象	[羯 諦]	[三 世]	[涅 槃]
	意 象		↑↓	
	(想) 心 象	[十 八 界]	[波 羅 蜜 多]	
識	識 象		↑↓	
	無 (行)	[創]	[齡]	[食]
	意 識 (識)	[咒]

「色即是空 空即是色」。

(実体はなく、実体がないからこそ)



領域	構成	<宇宙>		
外 部	対象 (色)	[電 子]	[素 粒 子]	[重 力]
		↑↓	
内 部	手段 (受)	[収 縮]	[宇 宙 膨 張]	[加 速]
		↑↓	
内 部	表 象	[暗 黒 物 質]	[暗 黒 エ ネ ジ ー]	[物 質]
	意 象		↑↓	
	(想) 心 象	[空 間]	[時 間]	
内 部	識 象		↑↓	
	無 要素 (行)	[物 質]	[生 命]	[心]
	意 識 (識)	[ビッグバン]

「素粒子」

(すべては、おなじもの)



「般若心経」

観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是 舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減 是故空中無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界 乃至無意識界 無無明 亦無無明尽 乃至無老死亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得 以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提

故知般若波羅蜜多 是大神呪 是大明呪 是無上呪 是無等等呪 能除一切苦 眞実不虛 故説般若波羅蜜多呪 即説呪曰 羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提娑婆訶 般若心経

般若心経の経典は、四つの経文（きょうもん）、第一経文（理）、第二経文（空）、第三経文（無）、第四経文（眞）、で成りたち、最初の第一経文（理）「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄」が、すべてを語ります。「中村一氏（「般若心経」岩波文庫）」の現代訳の要点は「世の中に存在する、すべてのものは、実体がまったくなく、実体がないからこそ、あらゆるものに存在することができる」と述べています。

そこで、この「実体」とは何かについて、はっきりさせることができればと。般若心経の経典での「実体」と、現代社会でいわれる「実体」のすがたはおなじもの、それは「素粒子」という点粒子の「はたらき」について述べていて、科学的な見地からもあきらかなことです。経典の発想の斬新さは、ひとの「こころ」を、ひとつの事象（はたらき）として、世のなかで起こる、あらゆるできごとを解きあかし明らかにしています。「こころ」という事象（はたらき）を、現代的な方法で突きつめていくと、この世のすべてが、ある一点のはたらきということにたどりつきます。すべてのもの、すべてのできごとは、もともとの「すがた」ともいえるもの、「素粒子（点粒子）」のはたらきだと、わかったことです。

そのことについて、経典に沿いながら、世の中でおこるすべてが、なぜ「素粒子」のはたらきなのかということ、知りえることができたなら、さいわいなことです。

第一経文（理）

観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

「求道者にして聖なる観音は、深遠な知恵の完成を実践していたときに、存在するものには五つの構成要素があると見きわめた。しかも、かれは、これらの構成要素が、その本性からいうと実体のないものであると見抜いたのであった。」中村氏訳文

「世の中のあらゆる、できごとは、すべて同じものから、どこにでもある素粒子（点粒子）というものの「はたらき」で。そのはたらきとは、いまのところ知られているのが、「強い力、弱い力、電磁の力、重力」の四つほど、でも、ほかにも、はたらきはあるようで、ひと（こころ）は、そのうち知るようになるはず。世の中で起こるすべてのことは、素粒子（点粒子）のはたらき、ということを知ることができただけでも、すばらしい、この世が、なぜあるのかがわかっただけでも、すばらしく、ひと「こころ」は、おだやかに、やすらかに、静寂のなかにあるように。」当訳文

第二経文（空）

舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是 舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減 是故空中無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界 乃至無意識界

「シャーリプトラよ、この世においては、物質的現象には実体がないのであり、実体がないからこそ、物質的現象で（あり得るので）ある。実体がないといっても、それは物質的現象を離れてはいない。また、物質的現象は、実体がないことを離れて物質的現象であるのではない。（このようにして）およそ物質的現象というものは、すべて、実体がないことである。およそ実体がないということは、物質的現象なのである。これと同じように、感覚も、表象も、意思も、知識も、すべて実体がないのである。シャーリプトラよ、この世においては、すべての存在するものには実体がないという特性がある。生じたということも

なく、滅したということもなく、汚れたものでもなく、汚れを離れたものでもなく、減るということもなく、増すということもない。それゆえに、シャーリプトラよ、実体がないという立場においては、物質的現象もなく、感覚もなく、表象もなく、意思もなく、知識もない。眼もなく、耳もなく、鼻もなく、舌もなく、身体もなく、心もなく、かたちもなく、声もなく、香りもなく、味もなく、触れられる対象もなく、心の対象もない。眼の領域から意識の領域にいたるまでことごとくないのである。」中村氏訳文

「素粒子のはたらきが世の中にあらわれるのは、ひとつに「もの」として、観測のできるすがたかたちとしての静態現象「きまり（宇宙法則）」と、「もの」として観測のできない異質なあらわれかたをする動態現象「予測（宇宙空間）」のふたつが、いまのところ。このほかにも、まったくわからない予測不可能なあらわれかたをしているものもあるようで。この世は、そんなできごとがまじりあう混とんとした世界、そのような素粒子のはたらきのなかで、奇跡なのか、ありふれているものか、わかりませんが、関心をもって注視していなければならないあらわれが、それは素粒子が「生きもの」を、生みだすはたらきをしていることです。この素粒子のはたらきは、「特異点」の現象かもしれませんが、それは「きまり（宇宙法則）」の自然のながれや、「予測（宇宙空間）」された異質さとは、まったく違い、思いもよらず偶然に「生きもの」としてあらわれたのかも、その生きものの特性は、みずからで、さまざますがたかたち（こころとからだ）に、おおきく変化させることです。不可思議なできごとのようで、生きもの（細胞）がうまれてから、さまざまに多種多様な生きものに変化をくりかえし、そのなかでも、とくに変化いちじるしいのが「ひと」という生きものかもしれません。ほかの生きもの（多細胞体）が、おもにすがたかたちを変化させていますが、ひとだけは、からだのなかに生まれた「こころ」というものを際立って変化させつけていること、そして、ほかの生きものの形態から急速に離れはじめていること、いまや、まったく違った生きものへと変化しつつあるようで、いまのところは、「ひと（こころ）」は、かぎられた狭い空間（地球という星）だけにいるので、それほどの変化はしていませんが、もともといるべき空間（宇宙）へもどっていくとしたら、「ひと」という生きもの（多細胞体）は、たぶん、ほんらいのすがたへと変化をくりかえしていくことでしょう。」当訳文

第三経文（無）

無無明 亦無無明尽 乃至無老死亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得 以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提

「（さとりもなければ）迷いもなく、（さとりがなくなることもなければ）迷いがなくなることもない。こうして、ついに、老いも死もなく、老いと死がなくなることもないというにいたるのである。苦しみの、苦しみの原因も、苦しみを制することも、苦しみを制する道もない。知ることなく、得るところもない。それゆえに、得るということがないから、諸々の求道者の智慧の完成に安んじて、人は、心をおおわれることなく住している。心をおうものがないから、恐れがなく、転倒した心を遠く離れて、永遠の平安に入っているのである。過去・現在・未来の三世にいます目ざめた人々は、すべて、知恵の完成に安んじて、この上ない正しい目ざめをさとり得られた。」中村氏訳文

「世の中は、すべて素粒子のはたらき、素粒子なければ世の中はない、それだけのこと。このことを知ることができたのも、ひとえに「ひと（こころ）」があらわれたからで、なぜなら、すべての素粒子のはたらきを知りえることのできる、唯一の生きものなのかもしれないので、このことは、とても、とても、たいせつです。いままで、「ひと（こころ）」が、知りえたことといえば、だひとつ、この世に生き、この世を去る、生と死、避けるこのできないもの、ただ、ただ、これのくりかえし。そうであるなら、ひと（こころ）の「生きる」ということが、とてつもないことと知りえているのでしょうか、そして、ひと（こころ）の内なるなかに、たいせつなものが生まれていることも知りえているのでしょうか。ひと（こころ）のなかに、喜怒哀楽（感情）だけでなく、感受性（感性）という「理性（推しはかる）」がしずかに浮かんでいることを、これも素粒子のはたらきなのだから。「理性」自身は知っています、ひと（こころ）が為さなければならないことを、そう、ひと（こころ）が為さなければならないなかで、もっともたいせつ

にされるもの、それは素粒子のはたらきのすべてを、知りつくさなければならぬことです。それが「ひと（こころ）」のはたらき、そのものなのだから。素粒子（はたらき）のすべてを知るため、かぎりのない歩みをつづけていかなければ、ならないのだから。」当訳文

第四経文（真）

故知般若波羅蜜多 是大神呪 是大明呪 は無上呪 是无等等呪 能除一切苦 真実不虛 故説般若波羅蜜多呪 即説呪曰 羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提娑婆訶

「それゆえに人は知るべきである。知恵の完成の大いなる真言、大いなるさとり真言、無上の真言、無比の真言、すべての苦しみを鎮めるものであり、偽りが無いから真実であると。その真言は、知恵の完成において次のように説かれた。往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に全く往ける者よ、さとりよ、幸いあれ。ここに、知恵の完成の心を終わる。」（現代訳文、岩波文庫・中村一「般若心経」）

「{知る} ために、からだどころ、を変えていることを、ひと（こころ）は知るべきです。そう、すべての素粒子のはたらきを知るため、過去も、現在も、未来も、どこまでもかぎりなく、これから知ろうとしているひと（こころ）、このことを知りえたひと（こころ）、すでに知りえて、さらに変化しようとしているひと（こころ）、それぞれ歩みつづけています。うそいつわりがない、これが真のひと（こころ）のはたらき、変化をつづけ「諸行無常（しよぎょうむじょう）」、不変はありえず「諸法無我（しよほうむが）」、真実そのもの「諸法実相（しよほうじっそう）」、なのだから、理性（かたよらず、こだわらず、とらわれず）をよりどころに、静けさ「涅槃寂靜（ねはんじやくじょう）」そのものが素粒子のはたらき、すべてを知るには、歩みつづけるだけだから。」（現代訳文 塚崎義人「個社会-2」）

=====